

姫路国際音楽祭 監督の榎本大進さん意欲



「自分が弾きたい曲、
聞きたい曲を中心に
プログラムを考えた」
と話す榎本さん
=大阪市北区

世界八カ国から若手演奏家十二人が集う「姫路国際音楽祭ル・ポン2008」が十月、姫路市内の三会場で開かれる。音楽祭の監督で、ドイツを拠点に活躍する播磨ゆかりのバイオリニスト榎本大進さん（29）が帰国し、「クラシック音楽に親しんでもらう場として定着させたい」と意気込みを語った。（片岡達美）

榎本さんの母親が赤穂市出身という縁で昨年、赤穂国際音楽祭の音楽監督も務めた。榎本さんは「演奏家、スタッフが気持ちよく仕事できる環境を作るのが仕事。初めての裏方で、大変だった」と振り返る。

その経験を生かし、姫路では会場を、パルナソスホール▽書写山円教寺▽手柄山の太平洋戦全国戦災都市空爆死没者慰霊塔 - の三カ所にし、公演回数も五回に増やす。

会場の一つ、書写山円教寺は、ピアノを運び込めないため、モーツァルト「弦楽五重奏曲第四番」など弦楽器中心の二曲に。各日ともプログラムの最後を多人数で演奏する曲を選び、盛り上がるよう工夫した。初日はブラームス「ピアノ四重奏曲第三番（四人編成）」で、最終日はシューベルト「八重奏曲へ長調」で締めくくる。

今年五月、ピアニストのマルタ・アルゲリッチさんの名を冠した大分県の「第十回記念別府アルゲリッチ音楽祭」があり、出演。日本の地方都市だが、“ベップ”は世界の演奏家に認知されているという。

そんな音楽祭をふるさと播磨にも根付かせたいと願う。榎本さんは「海外の演奏家に『今度はいつ姫路に呼んでくれるんだ』って言われるように成長させたいですね」と話している。

（神戸新聞 2008.6.24）